

## 要旨：資本主義の歴史的発展と『資本論』の読まれ方（小幡道昭 2017.8.4）

■**経済原論と『資本論』** 『資本論』150年の歴史をふりかえってみると、資本主義の歴史的発展のなかで異なる「読まれ方」が現れ、それがタイムラグを伴いながら、現実の社会に強いインパクトを与えてきたのがわかる。『資本論』の「読まれ方」の変遷をたどることは、資本主義の歴史的発展を理解する近道となる。この報告では、第1巻初版の刊行された1867年を『資本論』元年として、『資本論』50年、100年、150年を目安にそれぞれの「読まれ方」の特徴を明らかにしてみたい。

■**『資本論』元年** 『資本論』ははじめ第1巻のみで読まれる時期が続いた。第1巻だけを独立させて読むと、労働力商品が他の諸商品と同じく等価で交換されることで、資本のもとに剰余価値が形成されるという搾取論ではじまり、この剰余価値の蓄積が資本の集中・集積と産業予備軍の累積を生むという崩壊論で結ばれた完結した体系が現れる。このようなかたちで『資本論』を読むことができたのは、ドイツ語圏の読者のほか、フランス語圏とロシア語圏の読者だった。第1巻前半の搾取論は、フランス語圏の読者に、市場を媒介に自由な独立生産者を連合させるブルードン型の市場社会主義批判のメッセージを、後半の崩壊論は、ドイツ語圏の読者に、政府の政策的介入で生産協同組合を組織化するラッサール型の国家社会主義批判のメッセージを発信する書物として読まれたことがわかる。二つのメッセージはそれが向けられた言語圏でそのまま受容されることはなかったが、ロシア語圏では「市場社会主義」批判が「市場の廃絶」＝「計画経済」、「国家資本主義」批判が「議会参加型改良主義の困難」＝「政治革命」というかたちに脱文脈化され、やがてソ連型社会主義に骨化した。

■**『資本論』50年** 『資本論』50年の1917年は、レーニンの『帝国主義論』元年でもある。レーニンの時代の読者は、資本主義が帝国主義の段階に移行したという歴史的事実をはっきり認識していたが、『資本論』の読み方は基本的に前世代の1巻完結型から抜けだすことができず、基本となる金融資本の概念は、巨大産業資本と銀行の癒着という、集中・集積論に依拠した規定に狭められていた。とはいえ、金融資本が植民地支配を必然的に生み出すという結論は決定的だった。「マルクス主義」は「マルクス＝レーニン主義」として、20世紀の第三世界に強い影響力を及ぼし、『資本論』の窮乏化法則は、植民地支配、南北問題を解明する理論に読みかえられた。

■**『資本論』100年** 『資本論』100年は日本において、後発資本主義国に固有な『資本論』の「読まれ方」の総決算という意味をもっていた。そこでは、全三巻がはじめからセットで読まれるとともに、『帝国主義論』『金融資本』もこれと併読された。『資本論』では想定外だった日本の現状を、全三巻体系と帝国主義論を総合して説明することが求められたのである。この難問を解くため、さまざまな『資本論』の読み方が試みられた。宇野弘蔵の純粋資本主義論はその典型だった。

■**『資本論』150年** 『資本論』100年の今日までの50年は、20世紀の資本主義がのっていたプレートの大転換だった。その底流をなすのは、新たな資本主義諸国・諸地域の勃興だった。ソビエト型社会主義の瓦解と先進資本主義諸国における福祉国家型経済の挫折は、この底流のうえで生じた二つの転換と捉えることができる。今日、新興資本主義国の外圧で加速された先進資本主義諸国における新自由主義への転換は、同時にこれに対抗し資本主義からの離脱をもとめる内圧を高めている。しかし、商品経済の論理だけで構築された「純粋資本主義」の原理像は、そのネガとして、商品経済の全廃を根幹とするソビエト型社会主義像を暗黙裏に受容していた。この20世紀型原論を批判し、商品経済の論理で埋めることのできない「開口部」に焦点をあてる「変容論的アプローチ」の適否は後の歴史にまつほかないが、『資本論』150年の現実が、簇生する脱資本主義の諸運動を「社会主義」とよべるような、新たな「読まれ方」を希求していることはたしかである。